

応 化 会 だ よ り

昭和42年 第4号

早稲田応用化学会発行

巻 頭 言

中共産業の瞥見

鎮 目 達 雄

昨年10月大阪府工業協会の視察団に加わり文化革命酣の中を約16日間上海、天津、南京、北京、武漢の産業中心地を歩きました。全行程紅衛兵の監視下に政府お仕着せの模範的と思われる国营、大中6工場、人民公社等の視察で細やかなことは解りませんが要約致します。

一言に尽しますと日本の現況と比べ重化学、化学工業等の水準は15~20年位遅れている様です。中共の誇るAクラスの上海呉淞肥料工場は従業員約3千人尿素、硫酸、アンモニア、硫酸合せて年30万tでパイライト焙焼の旧式で日本の同規模工場の能率の約1/3、武漢の高名な鉄鋼コンビナートは工具数3万5千人熔鋼炉3基(1基未稼動)で1基の熔鉄量約500t/日で日本の最新鋭熔鋼炉1基5,000t/日に比し1/10となります。

その他鉄鋼圧延工場、起重機工場、旋盤工場、絨毯工場等の視察を致しましたが高度の機械化、合理化は遅れ工場内工員の余剰が目に残り、労働生産性は1ヵ月20万円(邦貨)位で日本の40~60万円、米国の70~100万円に比べ大変低いものです。

1965年統計(米国調査)

	日本	中国	倍率
鉄 鋼	6,900万 t	1,150万 t	6 倍
石 炭	4,900万 t	24,000万 t	1/5
石 油	8,200万 t	750万 t	11倍
電 力	1883億万K.W.H.	400億万K.W.H.	4.5倍
セメント	3,200万 t	1,000万 t	3 倍
穀 物	1,550万 t	18,000万 t	1/10
豚	—	15,000万頭	—
化学肥料	985万 t	400万 t	2 倍

南京郊外の代表的抹陵人民公社の視察では人口21,0

00人、耕地2,460町歩、16生産体(村)に分れ小学校84校(5,230人)中学校1(617人)、脱穀機291台、トラックは僅か6台です。

農民1人当り耕地僅か2.6反(日本の米作専門中農1.5町歩、米国加州の中農47町歩)に過ぎません。

直接訪ねた小隊長奚啓柱氏の年収穫か450元(日本円1ヵ月約6,000円)の低収で親子4人の生活は食べる丈が精一杯の有様、最近私有を許された豚2頭飼畜しこれが1年で1頭50元(8,000円)に売れ僅かに息をついでいるとのこと。

工場労働者は中卒初任給25元~30元(4,300円/1ヵ月)高卒30元~35元(5,300円)大卒50元(8,000円)労働者平均60元(9,600円)で、工場長は戦時中の日本の軍監督官の様な中国共産党の要人が派遣され30才前後で140元(22,000円)、賃金格差は7~9階程あり、最低は30元最高は総技師(技師長)250元位(40,000円)であり、勤務評定は行われています。但し昇給基準は目下大革命により毛思想意識の強さプラス技能が加味されます。

工場長は生産管理よりも工員の思想管理の役割を果たして居り、其のため一般人民の自主性積極性が低下して居ります。

物価は米(1升60円)豚肉(280円/キロ)魚(100円/キロ)野菜(白菜8円/キロ)醤油(1升100円)卵(290円/キロ)等で大体日本の1/2~1/3ですが酒(1升400~1,000円)衣料品は日本より3~4割高、ラジオ、写真機、時計、自転車等も約5割高で時計、ミシン、写真機は三種の神器と云われて居ります。ラジオも全部普及されて居りませんし、テレビは全く見掛けません。家賃は極めて安くアパート2DKで5~10元(800~1,600円)ですが設備は粗悪で便所、炊事場、風呂場は共用が普通です。しかし乍ら過去数十年戦争革命と明け暮れし極度の貧困生活を余儀なくされた人民は不十分乍ら衣食住と戦を与えられ現状に満足して居ります。国土は日本の26倍ありますが8億(1967年推定人口7億8000万)の龐大な人口で国民総所得僅か22兆で日本より少く、其の内原爆製造に10%

の2兆円を費して居り、極端な鎖国政策を強い工業の発展は遅れ富国強兵策を採り得ず、中国革命20年に及び民族資本家（昔の中小企業家で工場を政府に買い上げられ其の買上げ資本に対し1年定息5%を受け、全国約15万人定息総額年200億円に達し、最高1年人2億円収入の者が居る）並に政府高官（1ヵ月3〜5万円収入で住宅も立派、生活も豊か）の人間本来の物質的欲望が芽生え修正主義にならざるを得ず、毛沢東の純正理想主義の崩壊が危ぶまれ、今回の文化大革命の

極端な精神作興主義に頼らざるを得ないのが真相であらうと思われまます。

丁度北京に入りました時見聞致しましたが、日本の東大京大にも匹敵する北京大学、清華大学の学長陸平、万邦寿氏が紅衛兵学生を嗜しなめた理由で、修正主義のレッテルを貼られ頭に三角帽子を冠せられ便所掃除をさせられると云う激しい処置は昨年母校の騒動の比ではなく、隣国の極端な世相に識者の寒心を喚起して止みません。（旧制16回卒・大阪有機化学工業 社長）

教室だより

理工学部第3期工事の完成にともない、応用化学科の研究室が西大久保校舎へ移転致しました。ここに教室の専任教員名簿を掲載致し近況報告にかえます。

○理工学部所在地

新宿区西大久保4-170

電話(363)3211(大代表)

国電 高田馬場または新大久保下車 徒歩12分

トロリーバス 戸山車庫前下車 徒歩1分

バス 西大久保4丁目下車 徒歩2分

○専任教員名簿 (五十音順)

氏名	職名	現住所	大学研究室	
			号館一階数	内線電話
大坪 義雄	主任教授	文京区西片2-10-7	(811) 1551	1-9 361
石川 平七	教授	杉並区馬橋1-28	(312) 6063	10-1 254
加藤 忠蔵	〃	中野区中野2-24-5-527	(381) 2368	1-9 362
篠原 功	〃	杉並区永福町267	(321) 2039	1-10 364
城塚 正	〃	国分寺市南町2-16-23	(0423-21) 7387	10-1 253
鈴木 晴男	〃	渋谷区東2-12-1「藤ハウス」	(409) 3578	1-9 360
長谷川 肇	〃	小平市天神町2-209	(0423-42) 0281	1-8 356
藤井 修治	〃	新宿区中落合2-22-15	(951) 2833	1-10 363
村井 資長	〃	新宿区下落合1-456	(951) 3708	1-10 363
森田 義郎	〃	川崎市木月1-398	(044-41) 8916	1-9 360
山本 研一	〃	杉並区阿佐谷南1-32-22	(311) 3130	1-9 361
吉田 忠	〃	新宿区矢来町15	(269) 2762	1-9 362
宇佐美 昭次	助教授	草加市松原団地D61-304	(0489-3) 9830	1-8 356
佐藤 匡	〃	南多摩郡多摩町桜ヶ丘1-36-8	(0423-75) 8132	1-10 365
宮崎 智雄	〃	豊島区西池袋2-15-16	(971) 0834	1-8 357
土田 英俊	講師	武蔵野市桜堤1-1-7-302	(0422-51) 3868	1-10 364
平田 彰	〃	世田谷区太子堂3-7-9	(422) 3173	10-1 252

応用化学科主任室兼連絡事務室は1号館9階（内線電話355）にあります。なお各研究室には内線電話が通じておりますが、二つの研究室間の親子式ですので、ご注意ください。

今秋 応用化学科創設50周年記念式典を挙行

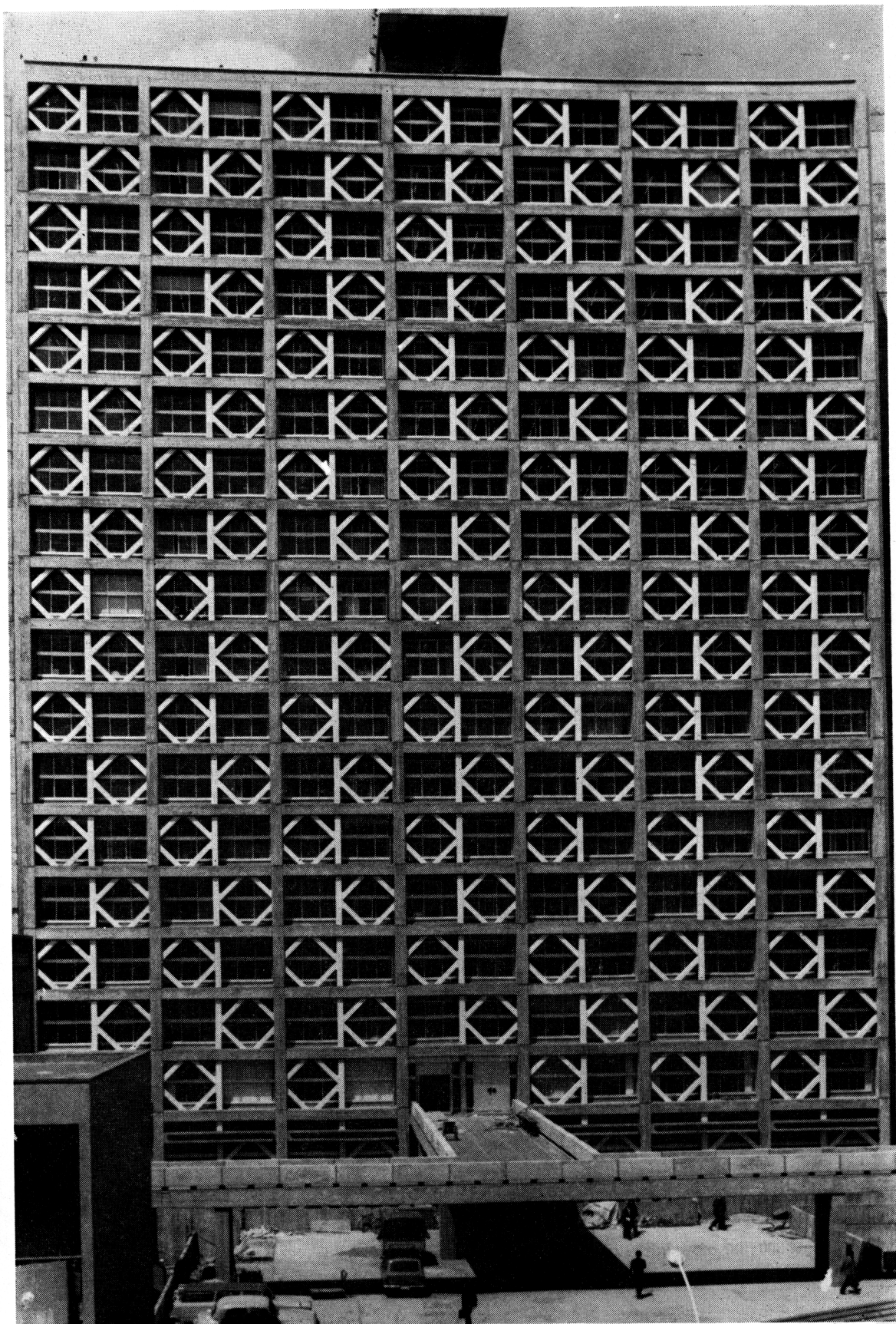
応用化学科の予科が創設された大正5年から起算すると、昨年で丁度50年をむかえておりました。その間理工学部の移転にともなう雑事のため記念行事がのびのびになっておりましたが、今秋下記の日程により記念式典を開催することになりました。詳細はおってご通知申し上げますが、会員諸氏におかれましてはあらかじめおふくみおき願ひまして多数ご参集下さいませうにお願い申し上げます。

日時 11月4日(土)午後

(b)理工学部校舎見学

内容 (a)記念講演 於理工学部校舎

(c)記念パーティ 於 椿山荘



1号館(研究棟), 正面より眺めた全景

会員の声

偶 感

釜石 山本祐二郎

昭和33年化工部長を最後に富士製鉄を年満退職してから、住めば都とはよくいったものである。釜石に定着してしまった。何か地域産業開発にお役にたてばと釜石瓦斯会社と釜石珪カル肥料会社を創設した。瓦斯会社は順調に発展しており、珪カル肥料会社は私の現在勤めている釜石化成産業と合併し珪カルムードに乗って進展の一途をたどっている。バイオニヤーという仕事はなかなか苦勞の多いものだづくづく感じた。昭和26年以来釜石市議会議員をつとめて、いささか地方自治にも貢献して来たつもりである。永い間釜石製鉄所の野球部長や、釜石体育協会会長もやった。昭和45年度は岩手国体開催ときまった。成功を心から祈ってやまない。昭和33年から釜石ロータリークラブの会員に推薦された。何か老人の社会奉仕はないかと、家内と相談して結婚媒酌人をつとめさせてもらうようになり、もう30組をオーバーした。「新郎新婦は美しきかな」。仲人は楽しいものである。一男四女ともに娶り、嫁し、今は老夫妻「念仏」に日日を送る毎日である。去る3月子供や孫を連れて久し振りに故郷土佐に墓参のため帰省した。「故郷の山は美しきかな」ではないが、晩年はふるさどで……と郷愁にかられた。

「母校」というものは妙な魅力をもっているものである。自分の勤めている会社に後輩が入社してくると、なんとなくうれしくて、遠い昔の都の西北の「学び家」を偲ぶものである。衆議院選挙があると、早稲田出身の当選者はと、新聞を鵜の目鷹の目でその数をかぞえてみたりする。応化出となると尚一層親しみをおぼえる。このなんとなく母校にあこがれる気持を満してくれるものは、できるだけ多くの卒業生が一堂に相会して語り合う機会をもち、友情を深めていくことではなからうか。「応化会だより」を発刊された水野敏行会長の御意向もここにあるのではないかと拝察している。

先年飛行機「木星号」で遭難、逝かれた、元八幡製鉄社長三鬼隆氏の遺徳を偲ぶ人人の間に、「苦楽会」という毎月一回氏の命日にあたる9日に銀座の「ビルゼン」で午餐会が開催されていて、もう15年もつづいている。誰でもよい、三鬼さんにゆかりのある人は集まる。会費300円である。私達地方在住者がたまに上京して、今日は9日であった事を思い出して行ってみ

ると、5年～10年振りの先輩や同僚に逢う事がある。積る話はずきずき、「おい、つきあえ」と夜の銀座へ「もつべきものはよき先輩かな」の感を深くする。

応化会もこの様な場所がほしいものである。お役にたてばと「チョッピリ」 (旧制7回卒)

卒業16年の回想

秩父セメント 川合善三郎

私が応化を出て、就職したのは戦後6日目、漸く日本産業も復興の緒についた昭和26年の春であった。

終戦の年に第一高等学院に入り、焼残りの第二学院に間借りした授業を経て、漸く待望の応用化学に入って豊明会記念の文字の下をくぐった時の喜びは入りのものであった。焼跡にバラックが散見されるに過ぎない当時としては金殿玉楼にも勝る立派な設備に見えたが厳冬といえども暖房は一切なく、先生も学生もオーバーを着たまま授業が行われる有様であって、今考えると随分、惨めな話の様であるが我々は決して不幸ではなかった。戦時中の空白を早く埋め様とする意慾に溢れた毎日であった様に思う。その頃にも学園ストがあったが、漸く到来した自由と平和と学ぶ権利を如何なる理由にしろ犯されたくない気持が強く、鬼面人を驚かす煽動家の言に同調する者は極めて少なかった。

吉田研究室での卒論の一年間は一生を通じても滅多にない素晴らしい一時期であったと思っている。先生の鋭いながらも温情のこもった指導の下に研究室全体が本当に一家族の様な雰囲気^{はなむこはなよめ}に包まれていた。今でも電着浴攪拌用のベビコンの音が耳に蘇えて来る。

吉田先生と大先輩の大友さんのお蔭で秩父セメントに就職が決まり、漸く華やかに成り始めた東京を後に3時間半、秩父の工場に赴任したが当時は何処でもそうであった様に、古びた疲弊した設備が待っていた。セメント製造現場に配属された当初は如何なる測定方法も通じそうにない古く巨大な設備、固体か流体か判らない得体の知れない粉体を前にどうしたらよいか判らない状態が暫く続いた。それから2、3年セメント工業にも技術革新の波が打ち寄せ、高度に計装化され面目を一新した各種の回転窯、粉碎機、輸送機等々、続々と出現して旧設備との更改、新設或いは新工場の建設と息つく暇もない近代化が行われ、今やコンピューターコントロールによる完全自動運転への道を着実に歩み続けて居る。

始めは見知らぬ人、機械、深くは理解出来なかった生産工程の仕組を前にわれ何を為すべきやと思ひ悩んだ新入社員も生産、改造、新設の渦の中に巻き込まれ批判の過程を経て現状と未来への必然性を或る程度認

識し始めた時には既に16年の歳月が流れて居た。

赴任した当時は漸く住み馴れた東京に未練が残り、秩父の水にはなかなか馴染めないものがあったが今では人情濃やかにして風光明媚な土地に住み、人を信じ人からも或る程度は頼られ、漸く解って来た仕事に精一杯打ち込める事に感謝している。人間到る処に青山ありとはこの辺のことをいっているのだろうか。それにつけても懐しく想い出されるのは早稲田の杜、先生先輩方、友人達であり、既に各方面に活躍されている後輩の人達を始め新装なった西大久保で学ぶ学生の方々の前途に栄光あれと祈る次第である。(旧制32回卒)

応化生のページ

………ほくら、わたしたちは新入生………

応化に進学して思うこと

萩原明修

僕は高等学院入学当初から、志望の応化に進学出来たので嬉しかったが、特別、難関を突破したという実感は湧かなかった。だから外部から入学して来た人達の真剣な顔を見ると、申し分けないような気がする。

学院時代は、先生が何から何まで指導してくれたが、大学は一人前の大人扱いである。自分自身で積極的に、何から何まで処理しなければならないので、途惑うこともしばしばだが、学院から進学したおかげでクラスは違っても、「やあ、君も応化か。僕もだ。よろしくな」そんな会話から友人が出来る。

こんな事から、僕は次のような事を考えた。

1. 大学生になったからには、自ら学び取る、積極的な体勢をとること。
2. 学問知識のほかに、人間形成に努めるようにすること。
3. 利己主義を排して、真の友情を培うこと。

以上の3点を、心にしっかりと留めて、早大生として恥かしくない人間に成長して行きたいと思う。

青年であることの意義

早田喜穂

我々はまだ18年しか生きていない。未経験・無知・理解不足・大人たちからは、この様なレッテルをはられる。しかし反面、その純粋さ・情熱・理想主義などは高く評価されている。子供の無知・不器用さから脱し大人の狡猾さ・醜さに毒されぬ美しき青春。青春そのものである我々青年は果して青春を本当に誇るべきものとして捕えているであろうか。

第一に青年は聡明である。固定概念に束縛されない。つまり常識という愚者の隠れみのにとらわれぬのである。純粋に理論的であり、権力への卑下は決して入りこめない。

第二に青年は美しい。生活にくたびれていない。はつらつとしたこの美しさは、しなやかな竹のごとく何ものにもまして優がある。

第三に青年は情熱をもつ。真実を求め理想を追い、知識を探し、その全エネルギーを自己の高揚のためにぶつけるこの情熱こそ青年だけが持つ力である。

これらは今の大人に求めても決して得られない。大人とは青春を忘れた人間のぬげがらの様なものであって、ただ青年の賢・美・熱に対して嫉妬を持つのみであり、それは反動として我々の前に立つ。しかし、そんなもので我々はおさえられるのであろうか。真の青年は決してへこたれはしない。ところが現実には、大人たちのひきょうな策に陥り、理想を忘れ、自由を嫌い、「これが現実だ」などとほざく者がいる。君のまわりにもいるはずだ。何て悲しいことだ。無気力・無目的の大人に君達はなり下りたいのか。それはすでに人間であることをやめた大人でしかない。そこに何の進歩、何の喜びがあろう。今の社会を見てみたまえ。暴力国会・インフレ・汚職こんなものを社会と呼ぶことを青年は断固として否定せねばならない。別に革命を起こせというのではない。ただ夢を持ってほしいのだ。大人達の社会における存在を断固拒否したい。青年は美しく強く賢い。そして我々は青年なのだ。断固立とうではないか。

早稲田に入って

和田幸子

早稲田に入って感じたことの第一が校舎についてであった。理工学部は、最近移転した為に、目下工事中であり、入学当時は中央の十八階の校舎も建築中であり校庭にはプレハブが立ち並び、これでも大学かしら大学はもっと緑に囲まれ、ひっそりとした静かな環境を期待していたのと思うと大変残念であった。

授業について、高校の時は、一講義が五十分であったのに、大学では九十分。入ってから途中で飽きてしまわないかと、抵抗を感じていたが、受けてみると時間の立つのは早くさっぱり分からない授業もあるが、大学の授業はこんなものであろうかと思ひ一生懸命ノートを取っているうちには、九十分なんてあっという間に過ぎていく。今までに困ったのが物理のレポートである。高校の時はレポート提出なんてなかったので、要領が分からず、連休の時にわざわざ高校の物理の先

生に書き方を教えてもらい、参考書で考察を調べ、やっと書き上げたレポートは、返されてみると赤鉛筆で沢山注意を書かれてしまった。今後もレポートは悩みの種になりそうである。その他、図学は製図の宿題が出て、期限ギリギリ迄、何枚も失敗しながら書いたが結果はいつも満足行くようなものが書けない。図学と化学、そこにどんな関連があるのか分からない。

そして、高校の時は先生といつでも話し合える機会が多かったが、大学では、何曜日の何時から何時と決まっているのは、便利でありまた不便でもある。しかし、その機会は大いに利用したいと思っている。

今まで、二ヵ月程が過ぎたが、困りに目をやる勇気がなかったが、今後は大いに活動範囲を拡大しようと思っている。その為に、先輩の良き御指導を期待しています。

(なお、現在応用化学科には女子学生は、大学院2名4年3名、3年1名、2年1名、1年4名の在籍をみている)。

ニ ュ ー ス

武富先生、停年ご退職、名誉教授に

大正9年東京帝国大学工学部応用化学科をご卒業後、直ちに本学助教授となられ、昭和5年には教授に進まれ、実に47年のながきに亘り当教室にあって学生の指導、ご研究ならびにわが応用化学会の発展にご尽力下さった武富昇先生は本年3月末日をもってご停年で学園から退かれました。

先生には益々ご健勝であられ、ご研究にあるいは後進のご指導に変わらない熱意をいだいておられ、大学にも時々おいで下さるとのことです。

なお先生には本学名誉教授の称号が贈られましたことも合わせてお知らせ致します。

中沢、中原両氏 昭和42年度 燃料協会賞を受賞

旧制2回卒 中沢克巳氏(東京瓦斯)は「都市ガス工業に対する貢献」により、旧制19回卒 中原 実氏(八幡製鉄)は「コークス製造技術に関する貢献」により昭和42年度燃料協会賞を受賞されました。

塩沢先生 熱管理功労者として表彰さる

旧制26回卒 本学理工学部工業経営学科塩沢清茂教授は熱管理法制定15周年式典において熱管理功労者として工業技術院長より表彰されました。

化学工学、田中先生送別会の報告

去る3月2日夜5時より大隈会館校友会館において応用化学科有志主催によって田中先生送別会を開催致しましたところ予想外に多くの知友の方の御参会を得まして本当に心温まる会となりましたことを司会者として心から喜び改めて感謝致します。先生は去る2月1日附で宇都宮大学工学部工業化学科の化学工学講座の助教授(教授欠員)として赴任され将来大いなる地域で御活躍になれる環境を得られるに至りましたことはこれまた我が応用化学科教室のため慶賀に値することでありましょう。ここに有難く紙上を借りまして深く御礼を申し上げます。

尚次に当日皆様より戴きました会費の収支報告を致したいと思ひます。御覧下さい。(石川平七記)

	取 入	支 出	備 考
会 費 (78名)	93,600円		会費内訳は下記の通りです。
記念品代 (6名より)	5,200円		会費1人 ¥1,200
記念品代 食 事 代 (78名)		23,000円	食事代1人¥1,000
受付人(2名) {食事代 {手当金		73,260円	記念品代1人 ¥200
		540円	6名からの 記念品代 ¥5,200
		2,000円	は欠席者よりいた だきました
合 計	98,800円	98,800円	

会 員 計 報

旧制3回卒 東 昌夫氏、旧制19回卒 遠山正三氏が逝去されました。謹んで哀悼の意を表します。

会 務 報 告

◇武富昇先生退職記念会◇

本年3月末日をもって早稲田大学を停年ご退職になられました武富 昇先生の47年間に亘るご在職中の職務上の多々なご功勞に対していささかなりとも感謝の意を表し、併せて研究上のご活躍をたたえるために、先生に記念品を贈呈申し上げることを企画致しましたところ、多数の皆様方のご賛同をいただき所期の目的を達することができました。なお6月8日、常会の席で記念品を先生に贈呈致しますが、ご賛同いただきました各位にはおって明細をご報告申し上げます。

◇庶務◇

- 昭和42年3月25日，卒業式及び送別会
卒業式に引続いて本部校舎15号館共通教室において
当会主催の送別会を開催した。本年度の小林賞は和田
実，竹内雄三，鷺尾紘子の三君に授与された。
- 5月3日 新入生歓迎会
理工学部校舎 2号館 101教室において昼食をとり
ながら歓談した。
- 5月25日 運営委員会
工業クラブにおいて殆んど全員が出席して行われ
た。主として，秋分開催される応用化学科創立50周
年記念式典について討論した。
- 6月8日 役員会及び春季常会
今年度は役員改選期にあたりますが，下記のとおり
新役員が決まりました。なお当日常会の席上で武富
先生への記念品贈呈が行なわれた。

昭和42年度役員

- 会 長 水野 敏行
副 会 長 棚橋幹一，大坪義雄
監 事 荒木 一郎
庶務委員 長谷川 肇
会計委員 鈴木 晴男
編集委員 宇佐美昭次
運営委員（教室側）吉田 忠，篠原 功，森田義
郎，（卒業生側）宮本五郎，平野静夫
大友恒夫，安部康雄，中曾根莊三，百
目鬼 清
なお会長，副会長，監事，各委員は
運営委員を兼ねます。

- 今春応用化学科を卒業された方々から工業化学実
験室に図書（実験化学講座 15巻）が贈られ学生の
ために大変役立つ。紙上をかりて厚くお礼申
し上げる次第である。
- 肝付兼英氏，および山口栄一，武富昇両先生が本
会名誉会員に推薦された。

◇会 計◇

昭和41年度会計報告

貸借対照表

(昭和42年3月31日)

借 方		貸 方	
摘 要	金 額	摘 要	金 額
現 金	565	前納会費積立金 (正有志会費249,700 学生会費207,000)	456,700
振替貯金	177,207	名簿刊行積立金	350,000
普通預金	26,627	基 金	1,357,000
定期預金	2,000,000	次期繰越金	81,532
郵便貯金	40,833		
	2,245,232		2,245,232

収支決算表

(自 昭和41年4月1日)

至 昭和42年3月31日)

取 入			支 出		
摘 要	金 額	予 算	摘 要	金 額	予 算
前期繰越金	61,951	61,951	会 報 費	191,115	250,000
正会員会費	444,600	430,000	集 会 費	130,629	80,000
有志会員会費	2,200		学生部会費	96,400	100,000
学生会員会費	159,000	140,000	集 金 費	24,050	60,000
広告料金	11,000	0	支 部 費	10,000	10,000
利 息	92,962	75,000	用 品 費	16,120	20,000
寄 付 金	1,357,000	0	事 務 費	60,250	70,000
雑 収 入	5,355	0	雑 費	16,972	10,000
			基 金	1,357,000	0
			名簿刊行積立金	150,000	(子) 0
			次期繰越金	81,532	106,951
	2,134,068	706,951		2,134,068	706,951

昭和42年度予算表

取 入		支 出	
摘 要	金 額	摘 要	金 額
前期繰越金	81,532	会 報 費	250,000
正有志会員会費	440,000	集 会 費	150,000
学生会員会費	140,000	学 生 部 会 費	100,000
利 息	90,000	集 金 費	30,000
		支 部 費	10,000
		用 品 費	20,000
		事 務 費	80,000
		雑 費	10,000
		子 備 費	101,532
	751,532		751,532

訃 報

山口栄一先生6月19日に逝去されました
謹しんで哀悼の意を表します

小林奨学基金利息收支決算表

(自 昭和41年4月1日
至 昭和42年3月31日)

取 入		支 出	
摘 要	金 額	摘 要	金 額
前 期 繰 越 金	122,995	教員研究費(1名)	80,000
貸付信託(9口)収益金	120,864	第13回小林賞(3名)	34,320
普通預金利息	2,300	雑 費	2,800
		次 期 繰 越 金	129,039
	246,159		246,159

基金9口 総計 164万円； 別口 1,201,790円

回数別会費納入率(%) (その1)

回 (人数)	40 年 度		41 年 度
	40年度末	41年度末	41年度末
旧 1 (14)	5.7	5.7	4.3
2 (18)	5.6	6.7	6.7
3 (13)	3.0	6.2	5.4
4 (22)	2.7	4.1	3.2
5 (21)	4.3	4.8	4.3
6 (7)	4.3	4.3	1.4
7 (14)	5.0	6.4	5.0
8 (6)	3.3	3.3	3.3
9 (12)	5.8	5.8	5.8
10 (16)	2.5	3.1	3.1
11 (16)	2.5	3.1	3.1
12 (14)	3.6	4.3	2.9
13 (22)	4.1	4.5	4.1
14 (15)	4.0	4.0	3.3
15 (23)	4.8	5.7	3.5
16 (24)	4.2	4.6	4.2
17 (34)	5.6	5.9	5.0
18 (17)	5.6	6.1	5.9
19 (31)	5.8	6.5	3.9
20 (22)	3.6	4.5	4.5
21 (28)	6.8	7.1	5.7
22 (28)	4.3	4.6	3.6
23 (27)	2.2	3.7	2.6
24 (33)	3.0	4.2	3.6
25 (35)	4.0	4.9	3.7
26 (21)	3.8	4.3	3.3
27 (25)	5.6	6.0	5.2
28 (31)	1.9	2.6	2.6
29 (31)	3.2	3.9	2.6
30 (22)	2.7	3.2	2.7
31 (45)	3.3	3.8	2.9
32 (47)	3.0	3.2	2.1
燃 1 (7)	7.1	7.1	5.7
2 (22)	1.4	2.3	1.4
3 (28)	1.8	2.1	1.8

4 (22)	4.1	4.1	3.2
5 (8)	5.0	6.3	3.8
6 (24)	1.3	1.3	1.3
7 (31)	2.9	2.9	6
エ1~15(82)	1.6	2.3	1.9

回数別会費納入率(%) (その2)

回 (人数)	40 年 度		41 年 度
	40年度末	41年度末	41年度末
新 1 (66)	3.8	4.7	3.9
2 (70)	3.9	4.7	3.6
3 (71)	3.0	4.4	3.0
4 (59)	2.5	3.9	2.2
5 (72)	4.2	4.9	4.3
6 (69)	3.1	3.9	3.0
7 (66)	4.0	5.1	4.1
8 (67)	4.6	6.3	4.6
9 (70)	3.6	4.1	3.4
10 (78)	3.8	5.3	4.0
11 (80)	4.3	5.5	4.3
12 (70)	4.9	5.7	4.1
13 (79)	4.4	5.2	4.7
14 (70)	4.1	4.9	3.4
15 (78)	3.2	4.4	3.3
16 (54)	—	—	4.6
大学院(42)	3.4	4.6	3.8
教 員 (1)	10.0	10.0	0
有 志(18)	3.5	4.3	2.8
平 均	37.1	45.5	35.9

昭和年度	年度末	1年後
32	33.6	41.0
33	34.3	41.7
34	30.6	42.0
35	34.9	44.7
36	37.3	45.8
37	38.8	45.8
38	39.1	45.7
39	37.8	46.2
40	37.1	45.5
41	35.9	—

昭和42年6月10日 発行

発行人 長谷川 肇

編集人 宇佐美 昭次

印刷 早稲田大学印刷所